春高混成競技の復活

★二年越しの意地

昨年、８００ｍの入山（３年）は、一気に県大会で自己記録を１分５７秒台に突入し、決勝進出をはたした選手だ。
しかし決勝では６位と０．０２秒差の７位で関東を逃した。

その悔しさから１年。入山は走り続けた。
昨年の優勝者は同じ２年生（浦和高）。負けたくない。

今年の３月に春高のグラウンドで偶然入山と話すことがあった。
「どう？」
「今日、記録会だったけど、あんまり良くなかったです・・」
・・・とあまり快活ではなかった。

私は「急に記録も伸びるものでもないし、今はケガをしないでね・・・」と、自分も選手だった経験から思いつく基本を伝えた。

この時期は冬季練習の疲れや、最後の県大会という意気込みから、なかなかすぐに記録更新というわけにはいかないものだ。とはいえ、県大会を前に気持ちは焦るのもまたよくわかる。

★決勝への走り

予選に出場した入山は、集中力は充分高揚していた。
オープンレーンになってからも積極的に先頭を走り、余裕のゴール。周囲を見渡すほどのリラックスした走りであった。
好調さが充分に伝わるレースであり、周囲にも大きなプレッシャーを与えられたようだ。

タイムも予選最高の１分５６秒台。通貨のプラスも、この組で入山に引っ張られた選手たちが多く準決勝に残った。

迎えた決勝。
昨年の悔しさを挽回したい。
県大会の８００ｍは当然着順勝負狙いになるので、大記録は出ない。３位くらいを狙っての位置争いになるのが常だ。

１分５６秒４４！結果は堂々の２位！

８００ｍでの関東大会出場は、１９９２年の黒川以来であろうか？
春高記録も１９９２年に黒川が保持しているので、是非関東の準決勝あたりで２０年ぶりに更新をしてほしいものだ。着順を狙う中距離での記録更新は、そういったレースでないとチャンスは少ないのだ。

ちなみに昨年の８００ｍ優勝者は決勝の場にはいなかった。何が起きるかわからないのが県大会。昨年の上位者が３年生になって順当に残るなんて楽観的な予測はできない。関東と異なり独特の雰囲気を持つのが県大会なのだ。

★春高混成競技の復活

春高は投擲が代々全国で活躍しているが、混成競技も非常に優れた結果を残してきた。インターハイでは５種競技で後藤秀夫さんが優勝（高校新記録）、２年時は３位（高校

新記録)、大塚寿さん・現監督が２位（埼玉県高校新記録）を獲得している。
そして８種競技では霜越が岐阜総体混成で好記録５３４１点をマークした。投擲の重さが変わった現在の県高校記録は５１２６点だから、砲丸の分を差し引いても十分な価値がある。

恥ずかしながら、私も混成５種をやっていた。だからよく解かるのだが、全国で戦う混成競技者は、どの種目でも県大会入賞の可能性があるほど「万能型」だ。跳んでも投げても、驚くほどの身体能力なのだ。後藤さん、大塚さん、霜越らは違う。後藤さんは混成競技以外に幅跳びやリレーでも関東で優勝している。特に幅では高校記録も狙うほど。大塚さんは砲丸で１５ｍを投げ、高跳びでは１ｍ９３を超えるスーパーマン。霜越はなんと両リレーにも出場し、関東大会へも進出している。４００ｍは５０秒２３を誇るスプリンターでもある。

その混成の伝統を担う新星が誕生した。
まだ２年生の菅沼 拓都だ。
細身のロングスプリンタータイプだろうか。

７種目を終えて菅沼は４位、このままなら関東へ出場できる。会場で後輩たちが言っていた。「菅沼はトラックが得意ですから」。なんとも頼もしい。

アナウンスでは「７種までのトップの選手が１５００ｍを４分２６秒で走れば県高校記録です！」と言っていた。
会場からは「えーっ、４分２０秒って・・・専門種目じゃん・・・」と、みなざわめいた。

スタートすると菅沼は２年生ながら堂々とした走りで上位グループにつける。私は、完走し４位をキープしてほしい・・・とただ願った。
混成のラストは脚がつったり、腹痛を起こし失速することも稀ではないからだ。

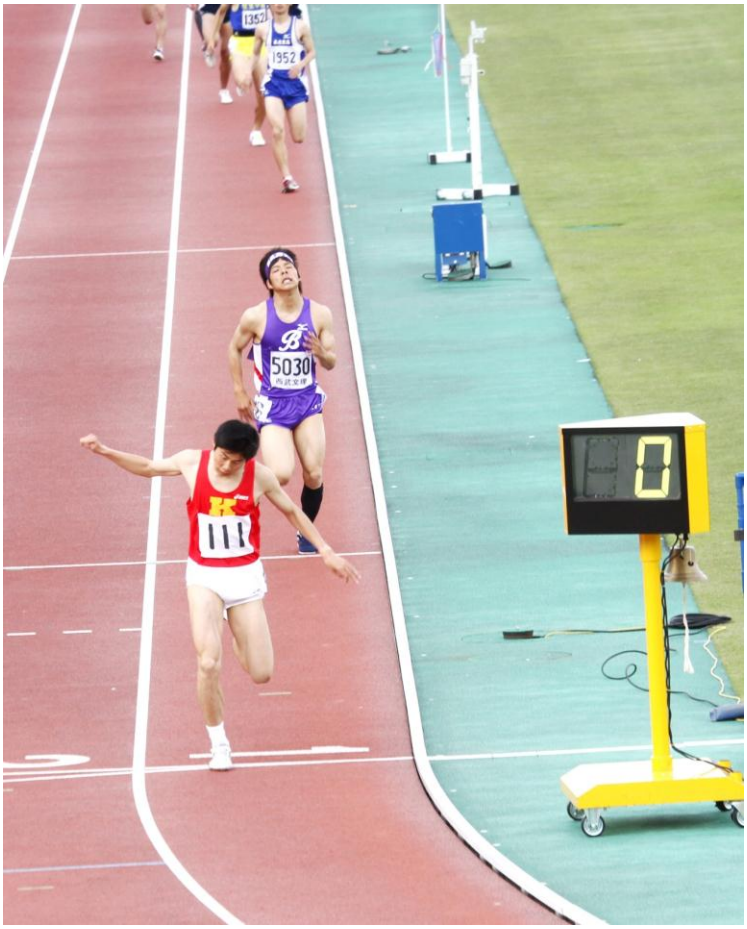
ところがそんな心配をよそに菅沼はどんどんペー

スアップ。残り３００ｍで２位につけ、二人のマッチレースになった。

会場は電光掲示タイムを見て歓声を上げた。「４分２０秒台確実だ！」

菅沼は残り７０ｍでトップに！ラストでもスピードは落ちない。

ついにトップゴール！
タイムはなんと４分２７秒２５の好タイムをたたき出した。混成の得点でいうと７６３点の高得点。混成では７５０点越えはなかなか無い。１００ｍに換算すると１１秒４台の価値・・・といえば分かりやすいだろうか・・・



スタンドは大きな拍手でいっぱいになった。疲れ切った８種目目で４分２０秒台。通常は１５００ｍの練習はほとんどやっていないであろう混成競技選手だ。
専門種目の選手たちも気がひきしまる思いであろう。

混成１５００ｍの素晴らしい走りをみて爽快な気持ちになった。
いろいろな種目で後輩たちはがんばっている。
そして春高の風は今年も吹いている・・・そう確信して私は帰路についたのであった。

筆　３７回　のもと

埼玉陸協・前理事長　小原先生の健康を気遣う西村会長。
我々も後輩として気が引き締まる思いだ。